

## 世界最古の下水道施設は宗教施設?

Is the oldest sewerage in the world religious facility?

谷口尚弘  
Naohiro Taniguchi

(株)東京設計事務所

### 1. 下水道遺跡の発見

20世紀初頭、ユーフラテス河の流域で栄えた都市の発掘調査が大々的に行われた。旧約聖書に出てくるアブラムの故郷ウルその他、バビロン、ニネヴェ、ラガシュ、エシュムナなどである。調査が進むにつれて驚くべき事実が分かってきた。紀元前3000年頃に栄えたこれらの都市で下水道の遺跡が見つかったのである。下水道はレンガやアスファルトで作られ、土管も使用されており、技術的にかなり高度のものであった。これらは世界最古の下水道と考えられている。

この地は世界四大文明発祥の地の一つであるが、同時期に栄えたインドのモヘンジョ・ダロやハラッパーでも下水道の遺跡が発見された。右の写真はウルで発掘された導水管である(出典:N. ウディ「建築材料の歴史」工業調査会、昭和44年)。

しかし、エジプトでは下水道遺跡は発見されなかった。なぜか? その違いの理由は宗教と古代都市の成立過程にあった。

### 2. 古代都市の成立

文明の起源はいずれも大きな河の存在が不可欠であった。河は定期的に氾濫し、その氾濫原を利用して農耕が始まった。ナイル、ユーフラテス、インダス河などは定期的に氾濫し、その氾濫原は肥沃な土地になっていた。旨いことに麦や米の生育期間は洪水と洪水の合間に一致していた。しかもこれらは保存の効く食料である。銅や鉄といった金属製道具の発達、それに伴う灌漑技術を身につけたことで人々の生活手段は狩猟や遊牧から農耕に大きく転換した。つまり人々は定住するようになり、食料を備蓄できるようになると消費のみで生活する商業や行政に携る階層が生まれてくる。これがやがて都市の成立を促すことになった。

もっとも恵まれていたのはナイル川流域であった。ナイルを除くと他の河川は気まぐれであった。増水、氾濫の開始が定まらず、河の流路も不安定であった。作物の出来不出来は天候に大きく左右される。人々は何度も自然に裏切られた。「自然は神によって支配

される」と考えた人々は人間と神との正常な関係を願った。そのため、ユーフラテス川やインダス川流域で都市が形成され始めたとき、最初に作られたのは神殿であった。宮殿が出来るのはその後である。神と人間をとりなす神官の役割を果たす人々が台頭し、宗教儀式を行うときには身を清めるために沐浴を行った。神殿には必ず浴場が付帯しており、清めに使われた水、即ち汚れとみなされた水は速やかに排出される必要があった。発見された下水道は浴場からの排水設備と排水を地中浸透に導く管きよだったのである。

当時の市街は、ごみは散らかり、虱も多くかなり不潔であった。従って排水施設は今でいう公衆衛生を目的としたものではなかった。

一方、ナイル川は「最も上品な川」と言われた。氾濫は規則正しく、下流での降雨量はもともと少なく、大変おとなしい川だったのである。したがって、上流で川の水位を観測すればほぼ氾濫時期を特定できた。王はこれを人々に告げることにより権威を保った。エジプトにおいては、神は人々に恐れられる存在ではなく、むしろ神の恩恵は神の代理人としての王を通じてもたらされると考えられた。神殿よりもピラミッドのように王を讃える記念碑が多いのはこのような理由による。ここには沐浴そのものの意義が薄かったため、沐浴後の排水を行う下水道という発想は必然的に生まれなかったと考えられる。

### 3. 日本との類似と相違

日本における最古の下水道は環濠であった。その後、本格的な都市として姿を現したのは藤原京である。ここでは碁盤目状に道路が張り巡らされ、側溝が付帯していた。これはシステム化された下水道である。環濠にせよ側溝にせよその目的は雨水排除であった。

農業の導入から都市の形成、国家への発展というプロセスは日本も世界も極めて類似している。しかし、下水道が造られた目的はかなり異なっているのは興味深い。気候風土の違いがやはり大きな要因なのであろう。

